

五城目町史／目次

はるかに遠い時代の郷土 二
原始時代の郷土 五

縄文時代——中山遺跡を中心に 六
 中山遺跡発掘 (六) 昭和末、平成初の発掘 (九) その他の縄文遺跡 (一一)
 縄文前・中期遺跡 (二四) 亀ヶ岡文化 (二四) 縄文の漆技術 (二五)
 三内丸山遺跡が教えるもの (二七) 地形を想像する (二七) 縄文交易 (二八)
 大陸との海みち (一九)
 粉跡のある土器——弥生時代はじまる 二〇
 志藤沢と新間 (二〇)

古代の郷土 二五
 巨大古墳 (二七) 阿倍比羅夫北征 (二八) 鰐田郡 (三一) 蝦夷 (三二)
 蝦夷のくらしは (三四)

出羽国 三七
 出羽郡から出羽国へ (三七) 開拓のありさま (三九) 出羽柵蝦夷反乱 (四〇)
 秋田城 四二
 出羽柵北進 (四二) 秋田城 (四五) 石崎遺跡・発掘 (四六)
 高橋論文——石崎遺跡は初めの「秋田城」 (五三) 遺跡の意味 (六三) 烽通信 (六四)
 砦のくらし (六五) 天長大地震 (六七) 出羽国緊張 (七〇) 元慶の乱おきる (七六)

岩野山古墳群 九一
 その形と副葬品 (九二) 被葬者は (九三) 蔵手刀 (九六) 開防遺跡は製鉄集落 (九七)
 率浦郷 九九
 和名類聚抄 (九九) 率浦郷 (一〇〇) 吉弥侯部系図 (一〇二) 馬産地 (一〇五)
 発掘された家 (一〇六) 志万太郎と新方次郎 (一〇九) 清原氏の内紛後三年の役 (一一〇)
 清原・安倍系図 (一一二) 奥州藤原氏 (一一二) 大河次郎兼任出自 (一一二)
 奥州征伐 (一一四) 大河氏と鉄生産 (一一六) 論功行賞・橘公業 (一一九) 兼任起つ (一二二)
 公業逃亡 (一二三) 国府を目指す (一二四)
 古代の信仰 一二六
 神への信仰 (一二六) 仏教ひろまる (一二七) 日吉(枝)神社 (一二八)
 郷土の寺院など (一二九)

中世の郷土 一三三
 秋田郡 一三五
 湖東部のひろがり (一三五) 橘氏と秋田郡 (一三六) 国・郡混乱 (一三七)
 橘公員と葉上 (一四〇) 洲崎遺跡・湯河湊 (一四二) 橘氏その後 (一四四)
 合戦たびたび (一四七)

安東氏の支配	一四九		
建武の新政 (二四九)	津軽安東氏 (二五二)	安東(藤)氏南下 (二五二)	河北千町 (二五四)
海みちの支配 (一五七)	脇本城 (二五八)	秋田氏 (二五八)	郷土の国人と城館 (二六〇)
五十目兵庫 (二六九)			
湊合戦	一七三		
秋田氏の支城 (二七三)	軍記の湊合戦 (二七六)	馬場目城をめぐる (二八〇)	
大館城代 (一八一)	山内城と円通寺 (一八二)	浦城をめぐる (二八五)	
信長との関係 (一八七)	砂沢城 (一八八)	「市」のはじまり(馬場目) (二八九)	
天下統一(豊臣秀吉) (一九三)	検地の結果 (一九六)		
集落のはじまり	二〇〇		
五十目の集落 (二〇〇)	五十目内記秀盛 (二〇二)	検地と分限帳 (二〇四)	
五十目藤原氏 (二〇七)	市の繁栄 (二〇九)	瀬戸座のはじまり (二一一)	
金屋座と鍛冶 (二一四)	天下御免の鋳物師 (二二〇)		
生活と信仰	二二二		
村人の生活 (二二二)	交通路 (二二四)	農民と信仰 (二二六)	
近世の郷土	二二三		
秋田藩政はじまる	二三五		
秋田実季転封 (二三三)	佐竹氏秋田に移る (二三五)	秋田藩の成立 (二三六)	
藩政の基本的しくみ (二三九)	五城目の給分・蔵分 (二四〇)	最初の検地 (二四五)	
黒印御定書 (二五四)	生活規則 (二六八)	事例・野田村 (二七一)	
新田開発	二七五		
戸村堰の工事 (二七六)	真崎堰と開発 (二七九)	開田と十王堂 (二八三)	
指紙開と注進開 (二八五)	水慣行 (二九七)	水利紛争 (三〇〇)	
用水路に関するとりきめ (三〇六)			
村々・百姓	三一〇		
親郷・寄郷・支郷 (三一〇)	村 (三一一)	村方三役 (三一一)	
近代の郷土	三二五		
新時代の動き・明治時代	三二六		
大区小区制 (三二六)	地租改正 (三三三)	郵便局と警察署 (三三八)	コレラ大流行 (三四一)
火防組 (三四三)	森嶽学校の創立 (三四六)	町村制の施行 (三五五)	五城目町誕生 (三六八)
地名・町名・村名 (三七二)	産業の発展 (三七五)	農家の支出 (三八二)	
市と職人の町 (三八六)	奥羽本線開通 (三九七)	くらしの変化 (四〇四)	
近代化への道・大正時代	四一一		
問題はらむ集落 (四一一)	電灯ともる (四一四)	町有林近代化 (四一七)	
五城目大火 (四一九)	五城目軌道線開通 (四二二)	グラウンド建設 (四二七)	
人びとの政治意識 (四三〇)			

現代の郷土	四三三
不況と戦争	四三四
冷害と農村（四三四）	
小作問題続発（四四〇）	
産業振興の施策・信用組合設立（四四三）	
農村対策（四五五）	
奥地の開発と道路（四四八）	
組合化と振興策（四五二）	
農学校と新聞（四五六）	
戦争がはじまる（四五九）	
戦時下の生活（四六四）	
五城目町・馬川村の合併（四六八）	
女学校創立（四六九）	
平和と民主主義―敗戦	四七二
農地解放（四七二）	
民主主義（四七六）	
発展への始動（四七八）	
新五城目町	四八六
町村合併（四八六）	
産業の発展（四九二）	
教育の充実（四九六）	
消防力充実強化（四九八）	
開発と交通（五〇一）	
道路の時代	五〇五
国道二八五号線（五〇五）	
磯ノ目開発・新役場建設（五〇七）	
きやどっこまつり（五〇九）	
中央通のにぎわい（五一三）	
「五城館」開館（五一四）	
高速自動車道と町の状況（五一八）	
町村合併（五二三）	
地すべり（五二七）	
高齢化すすむ（五二八）	
子供不足（五三〇）	
五城目の年中行事	五三三
年中行事	五三四
五城目町史年表	五六〇

五城目町史

執筆

小野

一二

はるかに遠い時代の郷土

わが郷土五城目と周辺の歴史は、縄文時代については多くの遺跡がこれまで発見され、石器や土器などの出土遺物などによって、そのころの人びとの生活の様子などが分かってくる。

しかしこの縄文時代と呼ばれる時代より以前のことになると、ほとんどなにも分からないと言われてきた。ところが、約二万年以上も前の五城目周辺の様子は、小型の象が動き回り、それを狩る人間もいたらしいことが考えられる。

この時代は、約二〇〇万年前に始まり一万年前に終わった氷河期の最後の氷期であるウルム氷期に当たる。平均気温は今より八度以上も低く、地球北部には結氷帯が広がり、海面は今よりも四〇メートルも下がっていた。そのため日本列島に当たる島々は大陸と陸続きになり、いろいろな動物が大陸から入って来た。

五城目地方の、そのころの気候からいって、寒冷地にすむ草食性のほ乳類ナウマン象も移って来ていたらしい。ナウマン象は、この辺りを歩き回っていたのである。

ナウマン象がすんでいたという証拠は、昭和町豊川の豊川油田内の天然アスファルト露頭の中にあつた。この中から獣の化石化した骨が発見され、その中にナウマン象の骨があつたからである。

豊川油田の天然アスファルトは江戸時代にも採取されていたが、明治時代中期になって舗装資材として事業化され露天掘りしたアスファルトからたくさんの獣の骨化石が発見された。ニホンジカ・ウマ・ニッポンイノシシ・野牛などの中に特に大きな骨と牙があり、それはゾウ目（長鼻類）のナウマン象のものであつた。

そのころの五城目地方は、海から遠い草原で、象も旧石器人も大陸からやって来たものであろう。狩り人に追われたナウマン象が露頭したアスファルトに誤って脚を取られ、その中に沈んでしまったのだろうか。ナウマン象が居たとす

れば、マンモスも居たのかも知れないはるかに遠いウルム氷期のころの郷土の様子やわれわれの祖先の様子が、不鮮明ではあつても浮んでくる。

現在のところ、マンモスの骨化石や旧石器人の遺跡は発見されてはいない。しかし豊川の天然アスファルトは縄文時代になると盛んに利用されている。このことは、別の章で取り上げたい。

	北海道 東北	関東	北陸 中部
草創期 B.C. 10000			
早期 B.C. 7000			
前期 B.C. 5000			
中期 B.C. 3000			
後期 B.C. 2000			
晩期 B.C. 1000 B.C. 400			

縄文土器（深鉢）の変遷
日本の考古ガイドブック（東京国立博物館）

原始時代の郷土

縄文時代——中山遺跡を中心に

中山遺跡発掘

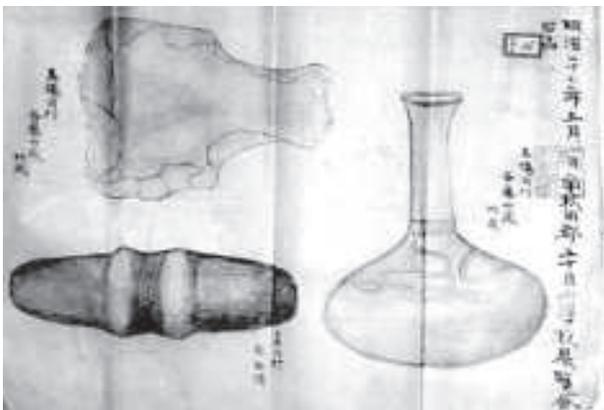
昭和五一（一九七六）年県教育委員会が発行した『秋田県遺跡地図』には、五城目町域内の縄文時代の遺跡として次の遺跡があげられている。

下台（岡本字下台五〇〇八〇） 広ヶ野（高崎字広ヶ野八一六八）
中泉田（高崎字中泉田） 行内沢（高崎字行内沢） 小野台（馬場目字小野台）

わずかに五カ所に過ぎず、いずれも畑地の遺物包含地で縄文土器の破片や石鏃・石斧・石匙が発見されたとしていて、すべて縄文晩期の土器だという。その上、所在地の地名が不正確である。昭和五十年代初めの時期にこの程度の遺跡数・内容とすると、地図は誠に不満と言わざるを得ない。

実は五城目では、海拔二〇〇〜八〇メートルの場所で、縄文土器やその破片が発見される場所が無数に散在している。こうした遺跡の一覧を、秋田県考古学の草分けの一人である真崎勇助が明治二〇年代に調査し、作成している（栗田茂治『南秋田郡史』）。それには現五城目町域のものが二五カ所もあげられている。

五城目（杉ヶ崎・七倉・森山々下） 上樋口（八幡神社山） 高崎（泉



五十目小学校展覧会出品之図

屋敷俗に中山） 浦横町（勘太郎ヤシキ） 小池支郷岡本（千田兼蔵ヤシキ） 馬場目（弟尺寺村・町村・台村・杉沢） 久保（梨ノ木岱・中台） 中津又（金森山） 面潟（岡本・細越・下台） 富津内（下山内昼鹿ノ台） 馬川（高崎中山） 内川（黒土・台ノ畑）
地名にやや不正確なものがあるが、郷土の縄文遺跡の最初の一覧である。それから今日まで縄文時代だけでなく、さらに多くの遺物包含地や遺跡が発見されている。わが郷土は、縄文時代に限っても遺跡に囲まれ、その上に町が存在するといってもよいほどである。

明治二七（一八九四）年五月一日五城目小学校創立二〇周年記念の「五十目小学校展覧会」を開催している。これに五城目と付近の出土遺物が展示されたが、出品された土器・石器などの模写図が残されている（真崎文庫「五十目小学校展覧会出品之図」）。

この頃、人類学（考古学）の県内の研究者が注目していたのは中山遺跡であった。真崎と並んで秋田の考古学の草分けと言われる東京人類学会会員の佐藤初太郎は、中山遺跡を発掘調査したくて馬川小学校校長として、この地に転任して来たという。佐藤はわが郷土では最初の学術的発掘調査を中山遺跡で行った。その報告書には次のように書いてある。

緒言（略） 去る一四日（略）職員生徒二〇余名及び五城目町渡辺由蔵を伴ひ、之を発掘したり、同地は日本石器時代地名表には、石鏃の産地として掲記しあれど、其発掘するや続々珍奇の土器石器類を得たるを以て、翌一五日にも亦之れに従事し、其翌一六日より（略）五城目町村上嘉七・横山安整・佐々木熊治郎・中村徳松の四氏の補助により（略）発掘に従事することとせり、然るに無智の民、研究の何たるを解せず、（略）日々千余人に達し、之が為め探求上妨害となること少なからず、加之時俗の徒種々の訛伝を以て、百方妨害を試みんとす、之れが為め四月一九日より一時中止するの己を得ざるに至りぬ。

地勢 南秋田郡馬川村高崎の西に（略）中山（泉屋敷といふ）と云へる丘陵の南斜面なる台地上の畑地なり、西に

は僅かなる山を塞ぎ、南東遙に馬場目の蜿蜒せる連山に対し、馬場目川帯の如く其間に流れ、田畦、村落は一望沖積新層の低地を埋む。思ふに石器時代人種が此斜面の丘陵上に居を占めたりし頃は、此田畦村里の地は未だ沖積新層の成生せざりし以前にして、満目只水界を以て充せしならん。

地質 (略)

遺物 遺物は石器多くして石器少し、勿論石鏃及玉類の如きは発掘の際泥土に附着して抛棄せられ、容易に認識する能はざるにありと雖も、石斧の如きも七八ヶを出したるのみ、石剣の破片亦然り、(略) 木炭の爐余と灰の多量とを出したるを以て、動物骨片等に注意したれども、只石上に朽腐したる魚骨(鮒の類)を認めたれども收拾すべからず、植物にては胡栗の一片を発見したれども、心なき人夫の棄つる所となる。土器は概して亀ヶ岡式にして、間々薄手無紋の弥生式に似たるあり、土器の中最も多きは瓶形にして、其破片によりて推算すれば径一尺七八寸より二尺位のものあるべしと思はる、今回発掘品にても稍々完全にして堅七寸五分に至るものあり、次に多きは銚子形土瓶形にして、大なるは長径四寸位のものより小なる二寸に満たざるあり、次は壺形碗形なり多くは外面に赤色顔料(ヘニガラ?)を塗抹せり、(略) 香炉形土器の如きは巧緻密之を打てば錚として声あり。

今回の発見物中最も余の愉快なりしは土瀝青(アスパルト)の出し事は是れなり、(略) 奥羽地方及北海道より多く出る所の石器土器に附着せる膠漆様物質は何なるべきか、之を熱すれば熔け、強く熱すれば黒烟を揚げて燃ゆ、甚だしき汚臭あり(略) 其性状並に産地によりて此物質の土瀝青ならんとの意見も同雜誌上に揚げたりしが、果せるかな今回発掘に於て精煉したる土瀝青数塊を出せり(略) (『南秋田郡史』)

この報告書は内容的に優れたもので、これによって中山遺跡は考古学上でも貴重な縄文遺跡とされた。そのためか、中山遺跡の発掘調査はその後八〇年以上も行われていなかった。しかし密かに発掘したりすることは跡を絶たなかった。

昭和末、平成初の発掘

ところが昭和五五(一九八〇)年、突然この地に町農協のカントリーエレベーター建設の計画が持ち上がり、農協は町文化財保護審議会と県教育委員会から周知遺跡であるので発掘調査をするよう命じられた。範囲確認調査は昭和五六・五七年度に行われ、さらに発掘調査が昭和五十七年七月一三日から八月二〇日までと、平成二(一九九〇)年九月一〇日から一〇月一〇日まで行われて、特記すべき成果があった。

範囲確認調査の報告書「中山遺跡」(昭和五八年三月発行)と発掘調査報告書「中山」(昭和五九年三月発行)「中山」(平成三年三月発行)を参考に、その注目すべき結果を述べておきたい。

昭和五七年は、丘陵上部A区と下部から低温地帯となるB区・C区を調査した。A区からは炉跡が確認できない住居跡一カ所を検出、また多数の土壙墓が検出され、中には骨片が認められたものもあった。また長軸がほぼ北向き(森山の方向)であった。中には人頭大の自然石を配したのもあった。B区にもA区と同様の土壙墓が多数検出され、丘陵縁部からは土器を埋設した遺構が数カ所発見され、土壙墓との関係が考えられる。C区は馬場目川支流による低温地帯で、湧出水が多く、トチ・クルミを含む泥炭層を確認しただけであった。

出土土器は、貼瘤文土器、入組状磨消縄文土器など多彩で、器形も多種にわたるが、特に赤漆塗の壺形土器が目をついた。多数の石器もアスファルト付着のものなどもあり、これも石錘はなかったが多種にわたっている。

昭和五八年(六月上旬〜七月三〇日)の発掘調査は、地図にある通りD区・E区を新しく設けているが、五七年度で残った部分、特にF区の湿地帯を追求しておどろくべき発見があいついた。木製品の大発見はドーナツ状の樹皮製品で、径一・四センチの木の枝を輪状にして、それに杉皮をまきつけたもので用途不明だが、マガギが使うウラダに似ている。この発見はわが国で初めてで、また唯一の遺物である。もうひとつの木製品の大発見は丸木弓の出土で、現存部七〇センチ(推定復元一メートル)、全面黒漆を塗った上に赤漆をこすりつけてある。中央部(径一・五センチ)に糸を巻いて漆で固めている。弓の材質はヤナギである。

また赤漆塗り櫛、籃胎漆器などの漆塗りの遺品の土台となっているものは多数出土した漆塗り土器、土器片であるという事実が、発掘の成果といえよう。

もうひとつの大発見は、編布（あんぎん・へんぶ）の出土である。漆をこしたままの布で、漆でかたまっていたこと、湿地の水分に守られていたからで、その広さは不明だが大変珍しい発見である。糸の原料は今も中山の東斜面一面に生えているカラムシの繊維である。

出土した大量の土器片と土器は、台付土器、鉢型土器、壺型、皿型、注口など、多様な器型のほかに、不完全であるが土偶など、無文のもの、縄文だけのもの、その他いろいろな施文がみられ、漆が塗られたものなどもあり、実に豊かである。

石器は三―三点を数えたが、多いのは石鏃で、円盤状石製品も多いのが特徴的である。ほかに三点の有孔石製品も出土している。

中山遺跡は注目される遺跡であったが、五八年の発掘調査によって、縄文漆器の全国的な遺跡とされた。この発掘は五城目のみならず、秋田県の縄文文化を書き替えることになった。

以上のことに、平成二年九月一〇日から一〇月一〇日までの、F区に接して低湿地に、F区を区切って行った発掘調査によって、さらに重要な事実が付け加えられることになった。

この発掘は台風が襲うなど、湿地帯を掘り下げての調査は、矢板で囲ったり、排水ポンプで排水をするなど、危険を冒しての発掘で、実調査日数は非常に少なかった。しかし成果は小さくなかった。次のことを、平成二年の発掘調査報告書「中山」のまとめ(1)土器と石器・(2)木器と漆器を再録しておきたい。

出土遺物

(1)土器と石器

縄文時代後期後半から晩期前半の土器が出土し、その器種も多種であった。このことについては昭和五八年度F区発掘調査と同様である。出土層については層位図等に示してある通り後期の土器が多く、泥炭層から大部分が出土している。

煤状炭化物が付着したり、煮沸のあとがある土器も多く、アスファルトによる補修の跡がある土器も少なくなかった。また晩期の土器には漆塗彩のものがあり、他の漆に関する出土資料とともに縄文漆工についての重要な資料となるであろう。また後期の土器の中に、有孔のもの、耳付きのものがあり、いずれも細紐か糸を通して吊せるような壺形土器で注目される。

石器は少ない出土であったが、茎部が丸くふくらむ異形石鏃と十字形石錐が出土した外に、赤色顔料が付着した石皿はその石質や形状とともに漆工関係遺物として特異なものといわなければならない。

(2)木器と漆器

木器は泥炭層から集中的に出土したが、厚板状、板状、棒状など製作技術がすぐれ、板状のものは今日の板材と比較しても見分けがつかないものもある。一部炭化したり、くぼみや穴のあるものもあったが使用状況や器形などは不明である。唯一はつきりしているのは赤漆塗飾弓（彎弓）で、サクラ樹皮をまいたり黒漆、赤漆の塗彩をするなど華麗な飾弓で、一方の端の部分が失われているのが残念である。昭和五八年にF区泥炭層から出土した漆塗丸木弓とは違い、その湾曲の状態から彎弓とされたが、佐賀県菜畑遺跡・埼玉県寿能遺跡の出土例とは全く異なる彎弓で、わが国考古学界の重要な出土資料といわなければならない。赤漆塗はソフテックス写真によって乾漆製であることが判明し、縄文漆工の技法が解明されただけでなく、櫛の場合は櫛歯をからみ留める糸がカラムシの糸であることや内部構造も明らかになり、その高度な製作技術が明らかになった。この櫛は歯以外はほとんど損傷がない大きめの堅櫛である。木器も漆器も縄文の高度な工作芸技術を具体的に提示した重要な資料である。

なお、ほかにクルミとトチの実が多量に出土、また出土した動物の角骨はすべて二ホンシカのもので、大型のものもあった。

このように、中山遺跡は縄文時代後期・晩期の、特に一連の漆工芸関係の資料が出土した重要遺跡であることが判明した。農協の事業は不許可となった。

出土資料は秋田県有形文化財や五城目町有形文化財に指定されている。

その他の縄文遺跡

縄文時代中期の遺跡として沢田遺跡（八郎潟町真坂字沢田）後・晩期の遺跡として中山遺跡を位置付けることができるが、その他の代表的遺跡をとりあげてみたい。

広ヶ野遺跡

葉師山麓から西にのびる台地は、馬場目川と富津内川に挟まれながらその合流点までつづいて平地に落ちる。この平地に落ちる舌状台地のさきに近い部分が広ヶ野遺跡とよばれる。円筒上層a式、b式の土器が主として出土し、その上に大洞b式、c式の土器も発見され、住居跡とみられる部分も少なくなかった。また、土



円筒上層式土器（沢田遺跡出土）高さ46cm

製錘が多く発見され、石鎌のほか打製石斧・磨製石斧・石棒などが出土していて、舌状台地上の遺物包含層は広大である。出土する土器から、この遺跡は中期から晩期にかけての複合遺跡であることがわかる。さらに、台地先端の近くに土塁と空濠跡がみられ、高崎よりの台地上から古墳石槨か石囲らしいものや朱を入れた甕が出土したと伝えられていることなどから、一〇世紀から一一世紀頃の遺跡も複合しているものと考えられる。この点では、郷土の縄文時代の遺跡のほとんどは古代のみならず中近世に

わたつての複合遺跡であることを、付け加えておきたい。この遺跡は、富津内川の流路変更工事・宅地開発によって未調査のままに消滅してしまった。

岡本遺跡

岡本集落の森山西側の麓から集落の間にかけて、山ぎわに南北にのびている遺跡である。相当の部分が、森山の急斜面が崩落した部厚い土砂の下に埋まり、全面的発掘は、非常に困難である。昭和二七（一九五二）年春の一部発掘では、畑の面から遺物包含層まで二メートル近かった。この時、石で囲った炉のある円形竪穴住居跡が発見され、大洞B式・同C式の土器と遮光器土偶の脚部や土製錘および石器が発見されている。後期から晩期にかけての遺跡である。この辺りからは、土師器も出土していて、ここもまた古代遺跡が複合している。なお、ここにつづく森山記念碑付近の森山遺跡から出土した土器は、中期のものである。

下台遺跡

郷土における縄文遺跡で最も低い位置にある。岡本集落から南に広がりながら、さらに低くなり、東を細越山にふさがれ、南と西に開けるところにある。古くから耕地化されて、ほとんど遺跡は破壊されてしまっているが、遺物包含層はまだ厚く広く残っていて、後期・晩期の土器と石器が多数出土している。特に川崎よりのところから出土発見された長方形の石皿は、この地方の典型的な石皿である。未確認の貝塚があったのもこの場所であり、細越山・森山・岡本の遺跡のかなめの場所である。ここも宅地となって消えてしまった。

小野台遺跡

馬場目川が中流でも流れが急になり、山間の上流に移る部分の湾曲したところの台地状に突き出た部分にある。台地はその脚部を流れに浸蝕されて崖（がけ）になっている。川の向こうは寺庭の集落で、小野台の集落はかえって遠い。遺物包含層は、畑地となっていて認められる。円筒上層式土器と、それにもなう石器が発見されている。石器には五〇センチの独鈷石が出土し、石斧も多く発見されているが、石製・土製の錘もまた多数出土し竪穴住居跡も五カ所ほどみつかっている。中期の遺跡であるが、その位置から見て馬場目川の漁労それもサケを中心とした漁労と関係の深い遺跡と考えられる。郷土の川にそった遺跡は、いずれもサケ漁と少な

らぬ関係があると考えられる。

野畑遺跡 井川村施田字野畑の遺跡を中山・岩野山遺跡につながる場所として、ここに特にとりあげておきたい。
大木式土器が出土する中期の遺跡である。ここから発見されるタイプの土器は、県南の遺跡に濃密にみられるもので、このことからこの遺跡は県南文化圏の北端の部分に位置しているといつてよい。したがって、沢田遺跡と野畑遺跡の間にある五城目は、県北の円筒式土器文化と県南の大木式土器文化の接触する地帯ということになる。沢田遺跡からは少数であるが大木式類似土器が発見されている。こうした事実、県南と県北の二つの文化圏の交流地点としての八郎潟周辺地帯の遺跡を特徴づけるであろう。

縄文前・中期遺跡

中山遺跡は縄文後・晩期とされているが、それより前の縄文前・中期の遺跡はどうだろうか。その時代のムラに、近くでは能代市杉沢台遺跡があるが、五城目ではそこまで調査は進んでいない。このころになると、土器文化に地方色が生まれてくる。大まかにいうと、秋田県北部は、円筒形土器、南部では大木式土器とそれぞれ名づけられた土器がみられるようになる。

前述のようにわが町は、ちょうど北部と南部と接触地帯にあたっていて、両方の形式の土器片が、内陸部・山間部に見つかっているが、その頃のムラであると特定できるまで調査が進んでいない。

亀ヶ岡文化

私たちは簡単に縄文時代などとよんでいるが、長い旧石器時代につづいて土器をもつようになった新石器時代に進んだ、始めの部分約一万年が「縄文時代」なのである。この時代を考古学では、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の六つに分けてしている。

しかし郷土では、今まで中・後・晩期の遺跡が発見されているだけである。

縄文時代の六つの区分けは、土器の種類ごとの形と文様の特徴から年代・時期の物指しにして土器型式をとらえて、時期の区分をする。しかし土器の型式は時代につれての変化だけでなく、地域による変化とその広域化があつて、ひと筋縄でいかないところがある。編年図を参考にしてもらいたい。

縄文前期・中期では、東北他方北部半分の地域には円筒土器、南部には大木式土器のそれぞれの文化圏ともいふべきものが成立していて、その南と北の文化圏の境界が秋田市と盛岡市を東西につなぐラインのあたりといわれ、その境界の南北の帯ともいふべき地域には、円筒土器と大木式土器の両形式の土器が出土する。郷土の中期遺跡は両方の土器が出土している。

後期から晩期の遺跡が郷土には多いが、出土する土器には亀ヶ岡式が目立つ。この土器は晩期に東北地方北部を中心にして成立した様式で、北海道南西部まで分布している。土器製作の技術と文様や装飾の技巧にすぐれ、造型の美しさに特色がある。

青森県津軽地方の木造町亀ヶ岡に発見された縄文晩期の集落遺跡から、多数の縄文土器が出土し、晩期の代表的遺跡とされ、「亀ヶ岡文化」とよばれるようになる。深鉢・浅鉢・台付鉢・皿・高坏・注口土器・壺・香炉型土器など、多彩な器種で、特に遮光器土偶は目をひく。

こうした亀ヶ岡式土器に漆を塗った、さらに華麗な土器が発見されているのは、八戸市是川の是川遺跡である。

中山遺跡から出土した土器は、亀ヶ岡文化圏に当時の郷土が属していることを証明しているとともに、是川遺跡にみられるような、あるいはその以上の漆技術を示す特別な文化が育っていたともいえる。

縄文の漆技術

縄文時代の物づくり技術のなかで、最も不思議なのは漆工芸の技術である。縄文前期の福井県鳥浜貝塚、中期の埼玉県寿能遺跡などの漆関係出土品は有名であるが、わが郷土の中山遺跡（後期・晩期）は、



石斧（中山出土）

縄文漆工芸の一連の資料と漆塗の丸木弓・弯弓まで出土していて「日本一」の遺跡といえる。

中山にある資料館「文化の館」^{やかた}に、出土した漆工芸資料などが展示されている。

漆工技術は、漆液の採取からその精製・塗装用漆の調合・調整・色漆の顔料の製造など、塗装以前の工程は、高度な技術が必要である。漆液の貯蔵、顔料との混合容器、塗装のためのパレットなど、一連の工程の容器、道具が考えられるが、中山遺跡からはそのほとんどが出土していて、漆採取用道具と塗装用の刷毛類が出ていないだけである。

特記したいことは、漆液精製をした編布が濾過作業中の形のまま発見されていること。赤漆調合のための赤色粉末をつくった石皿も出土していることである。

漆塗装工程では、夾雑物を除き、水分と湿度を調節と管理が大切で、これは今日でもむずかしい技術とされている。

中山遺跡からは、前述のように赤漆塗り土器の数々のほか赤漆塗櫛・籃胎漆器・赤漆塗丸木弓・赤漆塗弯弓など多様な製品がみつかっている。

漆は接着剤としても使われていて、土器の補修、石鏃などの柄への接着などにみられる。

中山発見の漆資料は、おどろくべき高度な技術を物語っている。

三内丸山遺跡 三内丸山遺跡によって、これまでの縄文時代が原始的生活文化という認識を改めなければならぬが教えるもの なかった。

貧しく小さなムラを営み、狩猟、採集によって食料を得るといふ不安定な生活をし、ムラはしばしば移動する、などというイメージばかりで、縄文時代を考えていた。しかし三内丸山遺跡はそうではない。

「縄文都市」などという、おおいに間違った形容をしたくらいに、いままで考えられなかった多人数のムラが営まれ、しかも一五〇〇年ほどの長い間そのムラが同じ場所にあった。

「縄文農耕」とまではいえないとしても、クリ・クルミ・トチなどの堅果類の林を、意図的につくり、管理していたらしいこと。エゴマ・ヒヨウタン・ゴボウ・リョクトウなどが出土していることから、一年草の栽培の可能性も考えられる。

巨大な掘立柱建造物跡、八〇〇棟ほどの堅穴住居跡、四二〇メートルも並列する土壙墓なども、縄文人の文化への新しい認識を迫るものである。

また、青森湾に近く、海に臨む場所であることから、この時代の漁業の様相、また他のはなれた地域との海上交通による人と物の交流がわかる資料も出土、発見されていることにも、おどろかされた。

郷土でも、縄文時代の認識に大きな影響をもたらすものと考ええる。

地形を想像する

広々野の中期遺跡の土地に人びとが集落をつくった頃、八郎潟の部分は男鹿島と本土の間に海峡を形成していたばかりでなく、本土に大きく湾入していて現在の湖東部の相当の部分は海であったろう。船越水道を形成する砂丘はまだ発達する前である。砂州が男鹿島と本土を結ぼうとするように、南と北の浅い海の上に細く姿をみせ始めるのは、縄文後期以降の時代と思われる。海進・海退などの現象もみられる時代もあった。

陸にくいこんだ入海の奥から、広ヶ野の岬が突き出し、その左右に南の岩野山と北の細越山が岬となって身をのり出し、さらにその北西の角に筑紫森から三倉鼻への岩だらけの岬が大きくつき出ている。三倉鼻から真坂・浦大町・浦横町・岡本とつづく山のすそは、静かに波のくだける海岸であつたろう。郷土の平地に臨む縄文遺跡から沖積地にうつる辺りは、ウラ（海岸）であつた。地名には浦横町・小竹花・貝保・宮岬崎・矢場崎・石崎など、浦や磯に関係のあるものが多い。今は残っていない古い地名に率浦・磯見浜・五十目などがあり、いずれも海岸と関係のある地名ということになるだろう。

海に近い場所から川にそって山地に入っていくと、山の麓から海岸に向う台地がのびており、川からは台地にかけて河岸段丘が発達している。台地上や段丘上は、集落をいとなむのに適している。馬場目川の上流には盆地がみられるが、この小さい盆地が水をたたえていたとすれば、さらに遠い地質時代であつたと思われる。

現在発見されている縄文遺跡の位置から、このような地形を想像するのは、そんなに無理ではないであろう。縄文時代人は、こうした風景の中で生活をいとなんでいたに違いない。

今、高台にある岡本陽広寺から下にひらける湖東平野の眺望は、低平で広大である。ちょうど田植えの始まる少し前の、一面に水田に水がはられたときに眺めると、海を幻想することができる。男鹿島と東側の陸とは、やがて発達した砂州によってつながり、海峡は湖となっていく。そして海退現象の海岸に、馬場目川は低湿な沖積地を拡げていく。

縄文交易

三内丸山遺跡の発掘調査で、もう一つ驚いたのは、出土品から遠い土地との交流・交易が具体的にうかがい上げられて来たことである。ヒスイ・コハク・アスファルト・黒曜石製の石鏃・石匙・石斧・玦状耳飾り、ヒスイは新潟県糸魚川産、コハクは岩手県北部産、アスファルトは前述したように昭和町産であり、黒曜石は北海道産出である。

そうしたものを入手するには、遠い土地との交易がなければできないことだ。物だけではなく、たとえば大型の掘立柱建物などの技術なども、交流によって学んだのではないか、などと想像がふくらむのである。

こうした交流・交易が、三内丸山の地形的立地も好条件になっていると思われる。青森湾の奥にある三内丸山は、波静かな海岸に接する場所にあつた。出土遺物からは、漁撈がさかんで、食料の相当部分がそれによつていたことがわかる。大型建造物も、舟付場や漁の仕事に関係が考えられるという。

三内丸山の海岸は「縄文港」であつたのであろう。そこへ、他の地域から海上をやつてきたり、ここから他の地域へ海上をいったのではないだろうか。こうした「海みち」は、対岸に通じていたのではないかという想像も生まれる。もちろん、新潟・秋田方面や岩手方面には陸上の道も考えられるが、「海みち」の方が長距離移動には楽である。

大陸との海みち

縄文時代の対岸大陸との交流・交易を物語る証拠は、郷土の中山遺跡からも出土している。また中山遺跡から出土する以前に、山形県遊佐町の秋田県境に接する三崎山遺跡から青銅刀子が発見されている。いっしょに縄文時代中期から後期にかけての土器や土器片なども発見されているから、その時期にこの土地の縄文人が手にしたに違いない。しかしその人びとは青銅器を製作する知識も技術も持っていなかった。日本で青銅技術がはじまるのは、弥生時代前期とされている。

三崎山遺跡の青銅刀子は、中国殷時代製作のものである。縄文社会はとぎされた社会ではなく、対島海流にのつてやつてきたものか、大陸の北の方からサハリン・北海道を経たコースでもたらされたものであろう。

中山遺跡で平成二年に出土発見された彎弓がある。この赤漆塗飾弓（彎弓）をひと目見た工業善道（故人、当時、奈良文化財研究所）は、中国から入ってきたものだといわれた。その後、東京国立博物館の松浦有一郎考古室長も、写真を見ると言下に大陸から直接にもたらされたものだといわれた。三崎山遺跡の青銅刀子と同じだったのであつた。

出土した遺物だけでなく、縄文時代後・晩期に栽培がはじまったという、「縄文農耕」の証拠にされているソバは、ロシア・カスピ海南部にあたりが原産地とされているが、これが北のうみ道を通り東北地方に入り、今日まで各地で栽培されているのである。

籾跡のある土器——弥生時代はじまる

志藤沢と新間

最近までは「イネづくり」のはじまりを、農業のはじまりとしていたが、すでに書いたように縄文時代中期から管理栽培や農耕がはじまっている。「縄文農耕」から「農業」が積み重なるようにはじまるのは、時間の問題であった。

昭和三〇（一九五五）年、青森県田舎館村の垂柳遺跡から、縄文時代中期の土器とともに六粒の米が見つかった。さらに昭和五六年には、弥生時代の水田跡一〇面が掘り出され、五七（一九八二）年、五八年には、さらに計六五六面の水田跡が見つかっている。また昭和五九（一九八四）年、弘前市の岩木山麓砂沢遺跡発掘でも、水田跡が発見されている。東北地方北部でのイネ栽培遺跡の発見は、センセイショナルなニュースだった。

ところで、郷土の極く近いところでも、同じような発見があった。

そのひとつは、若美町（当時は琴浜村）角間崎の志藤沢遺跡で、昭和三二（一九五七）年九月に底に籾跡がある土器が発掘されている。実際に籾跡がわかったのは年末になってからであるが、大発見とさわがれたのである。

これに加えて、井川町黒坪字新間（当時は井川村）の新間遺跡からも同様の発見があった。

昭和四一（一九六六）年籾跡のある土器片を発見した調査担当者の小武海松四郎は、四四年の秋田農業大博覧会に、それを展示するに当って、次のような一文を発表している。

（略）新間遺跡は、新間山（標高四〇m）の南西斜面で、扇状型沖積土層の畑地（標高三〜七m）足元から八郎潟東部水田地帯、海老沢、谷地中を経て、馬場目川デルタへと展開する地点だ。包含層（地表下三〇〜四〇cm）からのおもな出土品は、大洞A系を伴うヤヨイ式土器片、浅いハチ、ツボ、カメ型、台付など二百個を越え、磨製石斧、オモリなどの石器を混入し、東北各地の二、三の形式が入り混じっていた。

- ①外皮口辺の擦消ジョウモン、口辺に直角に走るハケ目、クシ目文
 - ②口縁に並行する三、四本の沈線。擦消文さらに数本の沈線。口縁内側の並行沈線
 - ③胴体部の縦走に近い細かなジョウモン（擦消）
 - ④工字形沈線
 - ⑤平底、揚げ底、台付けの台（平行二条沈線）……が主たる文様だった。
- 色は淡黄色、黒カッ色、青灰色で表裏とも滑面をもつものが多い。分類からして、棚倉（福島）・後北式（北海道）を若干含み、潟向Ⅰ・Ⅱ（金足小泉）、志藤沢の系統に近く、砂沢（青森）田舎館式に並行するものが大部分だ。新間のモミ痕土器片は、ハチ型土器の口辺口頸部の小片（三・五×二・六cm）で、並行沈線が内側に一条、外側に二〜四条と走り、細かなジョウモンに続き、モミ痕は内壁の滑面にハッキリ刻まれている。今春来、伊東教授に調査を依頼したところ、次のような教えを受けた。

「これで秋田県でのモミ痕出土地は二つになり、今日の米産地秋田の由来が古いことの証明になる。土器に付いている圧痕は、拡大写真で明らかのように稲のモミの特徴がはつきり現われている。長さは七・四mm、幅四・〇mm、長幅比一・八五で典型的な日本型稲。現在のモミと比べていささかも見劣りしない。時代は大体志藤沢式と同時代と思われる。実年代の正確なことは言えないが、少なくとも、三世紀ごろ、だろうと考えている。」

本県のヤヨイ式遺跡の立地条件が、標高四〇〜六〇m前後の段丘台上で、低湿田でないことと比較し、新間遺跡は八郎潟東岸にわずか三・七km、低湿田に近いことなどからも、今後の発見に多くの課題を投ずるだろう。（略）（小

志藤沢遺跡と新聞遺跡は、八郎潟の西と東の岸辺にあつて、ちょうど向き合う位置にある。そのころは八郎潟はまだ形成されていないから、本土と男鹿島の間は海峡であつた。さらに海面はいまより高かつたから、若美町側も井川町側も海岸線は相当に高い位置にあつた。遺跡は海辺に近い、当時の低地だつたと思われる。

郷土の現在の水田地帯の部分で、海面であつたところが少なくない。そして本町部に、海は湾入していた。したがつて多くの縄文遺跡は、海岸近いところに立地していたと思われる。

志藤沢や新聞と同様な立地条件の縄文遺跡が、郷土には数多かつたから、同じような発見があつても不思議ではない。いずれにしろ、郷土の地域一帯はイネ栽培の適地だったのである。秋田の弥生時代は、いまは干拓で消えてしまった八郎潟の東西の両岸からはじまつたのである。

そのころから、県内各地で弥生時代の遺跡が発見されるようになった。弥生時代の遺物、たとえばイネの穂を刈り取る道具の石包丁なども、みつかるようになり、イネづくりが県内各地で行われていたことが確かめられるようになった。

最近では、秋田市御所野台地の地蔵田B遺跡から弥生時代前期の集落跡が県内で初めて発掘されている。集落は柵で囲まれた防御的な性格をもつていて、われわれをおどろかしたが、遠賀川式土器が出土したのにもおどろかされた。この土器は北九州の代表的土器である。日本海ルートで遠い北九州地方と交流があつたものであろう。イネづくりもこのルートによって、秋田のみならず東北地方北部にも、意外に早く伝えられたものであろう。

地蔵田の人びとは、台地下の低地でイネづくりをしたのであろう。それが食料として十分であるはずがない。またこのムラでもイネづくりをしていたのではないから、基本的には縄文的生活をつづけていた。西日本のような認識はできない。

さらにつけ加えると、低湿地の天水田でのイネづくりだけでなく、山の手の縄文遺跡では、焼畑でイネづくりをして

いた所もある。一、二世紀に縄文的弥生時代がはじまつたが、どこも平均的な生産性だということとはできない。食糧問題に限ってみても、それぞれの土地で大きな違いがあり、それはまた文化のすすみ方についてもいえる。そのことを、歴史学者の新野直吉氏は「斑状文化」と名付けている。生産性は一色ではなく、それはまた文化に反映しているという、素晴らしい命名である。

近年の研究では、弥生時代のはじまりが、これまでの定説とされていた時期が修正され、五〇年から一〇〇年早くなると結論づけられている。この計算によると、津軽地方や秋田県内の「縄文イネ栽培」も弥生時代初期に始まるとする、すつきりした説明ができる。